

た。血液検査でビリルビンの高値と肝機能異常を認めたが血清アミラーゼは正常であった。腹部超音波検査、CT検査、ERCP、血管造影にて膵尾部の石灰化をともなった膵腫瘍および胆嚢総胆管結石症と診断し、脾合併膵尾部切除術を行なった。腫瘍は石灰化をともなった線維組織で覆われ、嚢胞部分と壊死組織をともなった充実性部分を認めた。病理所見では充実性部分は出血壊死組織とそこに腫瘍細胞を認めた。腫瘍細胞は好酸性の胞体と卵円形の核を有し異型性は認めず、PAS 染色陽性、 $\alpha_1$ -antitrypsin 陽性、電顕にてチモーゲン様顆粒を認め膵の solid and cystic tumor と診断した。術後7ヶ月の現在、経過は良好である。

12) 膵全摘後の膵内分泌および成長ホルモン分泌動態について

吉岡 一典・小山 真  
阿部 僚一・榊原 清 (県立吉田病院外科)

膵全摘術による内因性膵ホルモン分泌の欠如が成長ホルモン分泌に与える影響について検討した。対象は膵癌2例、乳頭部癌1例(いずれも胃全摘、胆摘、脾摘併施)。方法はブドウ糖経口負荷試験とアルギニン経静脈負荷試験。血糖、insulin c-peptide, human growth hormon glucagon を測定し、以下の結論を得た。

1. 膵全摘例では、ブドウ糖負荷試験で重症の糖尿病状態を呈し、insulin は低反応、glucagon は増加反応を示した。
2. アルギニン負荷試験では、insulin、C-peptide、glucagon はいずれも無反応であった。
3. 膵全摘術による膵内分泌機能の欠落が成長ホルモン分泌反応に抑制的に作用したと考えられた。

13) 胆道系内分泌細胞癌の2症例

綿貫 啓・谷口棟一郎  
家里 裕・竹吉 泉 (小千谷総合病院)  
川野 賢一・横森 忠紘 (外科)  
五十嵐俊彦 ( " 病理)  
江村 巖 (新潟大学病理部)

症例1: 乳頭部腫瘍のため、閉塞性黄疸をきたした症例で、膵頭十二指腸切除術を施行した。高分化管状腺癌と扁平上皮癌の合併あり、Grimelins stain (+), somatostatin stain (+) で内分泌細胞癌と診断された。

症例2: 胆嚢頸部の腫瘍で、電顕にて endocrine granules が認められ診断された。

2例とも1年以内に肝転移をきたした。内分泌細胞癌は、発育進展の早い極めて悪性の高い

癌で、リンパ管、血管への侵襲が強く早期にリンパ節転移や肝転移をきたし易い予後不良の疾患である。

14) 胆嚢の腺扁平上皮癌4例の検討

筒井 光広・加藤 清  
佐々木寿英・佐野 宗明 (新潟県立がんセン)  
梨本 篤・赤井 貞彦 (ター新瀉病院外科)  
丹羽 正之 ( " 内科)  
黒崎 功 (新潟大学第一外科)

1974年から1988年までの15年間に当科で経験した胆嚢癌切除例は52例であり、このうち腺扁平上皮癌は3例(5.8%)、扁平上皮癌は1例(1.9%)であった。これら4例は何れも大きな腫瘍を形成した Stage III 以上の進行癌であった。腺扁平上皮癌のうち高分化型の1例は肝床切除と横行結腸合併切除を行い4年間生存中である。他の2例は中分化型と低分化型で、中分化型の1例は肝床切除による治癒切除が行われたが術後肝転移により死亡した。低分化型の1例は非治癒切除で術後早期に死亡している。扁平上皮癌の1例は高分化型癌であり、肝床切除が行われた。1年2ヶ月後にリンパ節再発を来したが再手術が行われ、15年後の現在生存中である。

扁平上皮癌や腺扁平上皮癌は周囲浸潤が強く予後不良と言われていたが遠隔転移は少ないと思われることから、とりわけ高分化型では積極的な切除により良好な予後が期待できる症例があると考えられた。

15) 胆嚢癌の形質発現

片山 麻子・渡辺 英伸  
古田 耕・佐藤 正弘  
阿部 実 (新潟大学第一病理)

[目的] 隆起型と表面型胆嚢癌を構成する癌細胞の性質を組織化学的に検討した。[対象] I型隆起を有する原発性早期胆嚢癌8例から得られたI型部分8領域とII a, II b型部分の6領域を用いた。[方法] 代表切片を用いてCA19-9染色、HID-AB染色、Calactose oxidase Schiff (GOS)染色、Concanavalin A Paradoxical (CPS)染色、Grimelius (GM)染色を行い、非腫瘍性胆嚢上皮細胞の分類に準じて固有上皮型細胞、表面上皮粘液化生細胞、腺窩上皮型細胞、幽門腺型細胞、杯細胞型細胞、内分泌細胞型細胞に分類した。[結果] 1. 全例に化生型細胞がみられた。2. I型領域はII a, II b型領域に比べて表面上皮粘液化生細胞と腺窩上皮型細胞の出現頻度が高かった。3. 化生型細胞は、種類ごとに出現部位に特徴がみられた。